

マルチ・ファーマーの女性たち

コピーライター 森 由香

もり ゆか さん



札幌市の広告制作会社勤務を経て、現在は「企画制作室mc m」で広報・広告に関する企画&原稿制作に従事。「北海道」と「農業」の情報発信にかかわるべく、道内各地の取材に走り回っている。季刊誌「カイ」編集・ライター、月刊誌「農家の友」編集委員。北海道フードマイスター、農都共生研究会メンバー。

◆北海道農業には

どんなコピーが似合う？

はじめまして。コピーライターの森と申します。

コピーライターという名称はだいぶ認知されたとはいえ、「どんな仕事？」「何をやる人？」と、広告関係以外の方にはよく聞かれます。なかなかズバツと答えられないのですが、「何かを宣伝したい人になりかわって、企画とコトバを考える仕事」という感じでしょうか。

たとえば、北海道産の豚肉をもつとPRしたいとなった場合。道産豚肉では少々カタイなので、「クリーン農業+豚肉」で「クリトン」という名前にしたらどうだろう…などと考えるのがコピーライターです。もしも、その方向で決まったら、デザイナーやマーケティングの人たちと次はいかに「クリトン」を広めるかを考えます。

かわいい豚キャラクター「クリトン」を作ったり、CMで「クリトン」が耳に残るようにしたり、「クリトン先生の食育講座」を

開くのもいいかもしれません。ポスターやパンフレットを作るようになったら、その文章の部分を担当するのもコピーライターです。

そんなことを広告制作会社において長く続けてきましたが、一〇年ほど前に道庁農政部で発行している「コンファ」という農業情報誌の仕事をする事になりました。その頃から「農業」への関心が高まってきました。道内の農業地域を回り、意欲あふれる生産者の皆さんと会ううちに、「こ

んに、こんなにすごい北海道農業の魅力をもっと伝えたい」とフリーランスになり、今は農業系コピーライターとして情報発信を続けていま



創刊から5年目を迎える「季刊誌カイ」。サイズはB5判。1シーズンかけてじっくり読める内容を目指している。

す。

さらに、この場をお借りして宣伝させてもらうと、「ホツカイドウマガジン・カイ」の編集の仕事もしています。五年前に創刊した「カイ」は、「北海道を探しに行こう」をテーマに毎月特集の切り口を変え、北海道の魅力を深く掘り下げて紹介している季刊誌です。

四月二〇日発行の春号のメイン特集は「駅」、サブ特集は「オーガニック」です。

雑誌としての知名度はまだですが、内容はなかなか面白いと思いますので、もしも書店・コンビニで見かけたら手にとっていたいただけるとうれしいです。

◆ググッと農の世界へ

女性農業者との出会い

季刊誌カイでは、「食と農業」に関する記事も創刊以来ずっと続けています。その取材で出会った中村由美子さんは、私をググッと農業の世界へ引き込んでくれた女性農業者です。千歳市の開拓酪農家の四人姉妹の長女に生まれ、後継者となるべく酪農学園大学に進

み、現在は経営者として中村牧場を仕切っています。

いつも驚かされるのは、忙しい牧場の仕事をしながら、数多くの活動に参加していること。最初に取材した時は、石狩管内女性農業者ネットワーク「グググのグ」の会長でした。さらに、北海道全体の女性農業者ネットワーク「きたひとネット」の事務局長、千歳市グリーン・ツーリズム連絡協議会幹事、他にもまだまだ肩書きがあるはずです。

仲間と「直売所をやるう！」と決めたら畑作にも挑戦し、農家による直営そば店「駒そば亭」の運営に関り、二〇一三年からは店長も引き受けています。地元の駒里地区はお祭りやイベントも多く、つねに実行委員として駆け回っています。…書いているだけでも、目が回ってきました。

中村さんを動かすものは何か。ひとつは「千産千消」を掲げるように千歳の「食と農」をもっと消費者に知ってほしいという想い。もうひとつは、自身の経営者としての経験から、女性農業者たちが前向きに農業と取り組める「道すじ」をつけたいと思っている



夏の人気イベント「北大マルシェ」で千歳産をPRする中村由美子さん。背後でかき氷作りを手伝う筆者（写真提供：農家の友）

のではないかと思います。

中村さんをはじめ、パワーあふれる魅力的な女性農業者とたくさん知り合いましたが、一方では、北海道は女性にとって厳しい職場環境であることも知りました。女性役員が二名以上いるJAを調べた調査では北海道は一〇JAのうち三JAしかなく、また農業委員の女性が占める割合も二・七%と、全国の中でワーストを争う低い数字です（平成二三年度）。

大型機械を駆使する大規模農業中心の北海道では、男性主導になってしまふのかもしれない

ませんが、この開放的な風土や道民気質を考えると、私にとっては意外な数字でした。

雑誌「農家の友」の企画で中村さんが若い女性農業者たちと対談した後、「若い子がこう言ったの。農業は女性の地位が低すぎる、こんな思いは私たちの代で終わらせたいって。これはそのまま、私たちが言い続けてきたことなんだけど、まだ同じ思いをさせているんだよね」。いつもはニコニコと朗らかな中村さんが少し悔しそうに話してくれたのが印象的でした。

◆いい時間を一緒に

手前みそに願いを込めて

男性は一つのこと集中し、女性は一度にこなす「ながら」が得意という話をよく聞きます。農家のお母さんの「ながら」は半端じゃありませんね。農作業、子育て、家事、経理、さらには消費者に目を向けて直売所や加工品作りにも積極的です。

女性農業者が集うイベントで知り合った内藤圭子さんは、安平町でアンガス牛を育て、直売もしている酪農家です。町内の農家のお

母さんたちと一緒に「NPO法人ココ・カラ」を立ち上げ、ますます忙しくなってます！と言いつつもイキイキしています。

二月にココ・カラ主催の「味噌作り講習会」があるので、念願の「手前みそ」を作ろうと安平町へ行ってきました。「使う大豆は安平産で、米麹も厚真町の加工場を借りて作ってきました」という内藤さんの話を聞くと、これはおいしい味噌にしなければと混ぜる手にも力が入ります。大豆と米麹と塩を合わせてよく練り、フィニッシュは空気を抜くために、丸めた味噌玉を力いっぱい樽に投げ込んでいきます。これもまた味噌作り



味噌作りを締めくくる樽への投げ入れ。力強く、かつ愛情も込めることがポイント

の醍醐味で、日頃のストレスとやらも樽がしつかり受け止めてくれます。

ココ・カラの皆さんが場の雰囲気盛り上げてくれる中、知らぬ同士の参加者もいつしか和やかムードに。今後定期的に開かれるという料理講習会に、「また参加したい」という声が続々とあがりました。

生産者と消費者が交流する場はずい分と増えました。その時間は、生産者の皆さんが農作業の合間をぬって、知恵を出し合い、工夫をこらして作っているもの。農業という仕事のポリュームと深さを知るほどに、その時間



NPO法人ココ・カラ代表の内藤圭子さんを囲んで。味噌作りの後のおしゃべりもまた楽しい

がいかに貴重なものかを感じます。私が取材し書くことでどれだけ伝えられるか、少しでも「つなぎ」の役ができるのか、まだまだ道は遠い気がします。この春からもたくさんのお出合いを求め、農業の現場へ出かけていきたいと思えます。手作り味噌とともに、いい夏を過ごし、おいしい秋を迎えられるように。